

分析、日本の方策示す

中嶋 嶺雄著

新冷戦の時代

国際情勢はますます複雑になり、最近の日本の論調の中には、一方において人類の未来に絶望する悲観論があると共に、他方では日本の戦後の体制を根本からたて直して強い日本をつくるべきだという強硬論が唱えられており、現実主義的政治学はもはや有効性を失ったと論ずる人びとも現れている。この時にあたり、安全保障や平和の問題を切実かつ冷静に考える態度を貫きながら、国際関係の現段階を分析し日本のとるべき方策を示そうとする本書は、現実派からの知的挑戦として注目すべき議論である。

著者は、今日の国際環境を冷戦と熱戦の間の段階としての「生ぬ

るい戦争」の時代と規定するが、それは同時に「新しい冷戦」の時代としてとらえることができる。述べ、現代の国際関係がほぼ十年間隔で大きく変動するという事実に注意を向ける。ひとつの状況を固定的に考えてはならないというのが著者の警告であって、特に現在の中ソ対立は本来的なものでいつまでも続くとは決めてかかる考え方を「中ソ対立の神話」と呼ぶ著者は、中ソ対立には「いまやその変化の可能性を支える条件が徐々に成熟しつつあることを無視するわけにはゆかない」ことを、くり返し強調している。

著者の専門領域である中国政治については「内政要因は国際政治

のパワー・ポリティックスの要因よりも強いと断言してよいのではないか」という立場をはっきりと表明し、日中平和友好条約の締結を「第二次世界大戦前の日・独・伊三国同盟に比すべき歴史的意味をもつことになるかもしれない」と論ずるなど現在の日中関係のあり方に対する著者の批判は厳しい。日本は国内的には他の国々に比べて安定しているが、外交の選択を一步誤るととり返しつけないことになる危険に面している。著者のいう「外交こそが防衛戦略である」という主張に真剣に耳を傾けるべきであろう。

(TBSブリタニカ・1000
東大教授 本間 長世

読んでます



中嶋 嶺雄

浜東の囚人」が大ヒットしたという。この本は中国の労働キャンプの過酷な現実を描いた証言であるが、最初はアメリカで一九七三年に出版され、フランスでは七五年にガリマール社から「証言双書」の一冊として出て、むしろフランスで大いに読まれている。

本中国のあて探しでパリ

昨日、モンパルナスの本屋でようやく探して得たのは「毛沢東・聖人伝の現況」である。これはエミール・ギコワティが編み、写真集で、四年前パリで刊行された。ユニークな中国評論で知られるシモン・レイが序文を書いている。近代中国の開闢から毛沢東の死までの貴重な写真と全世界から集めて解説したコレクションであり、毛沢東の通俗的な写真集とは異なっており感動的かつ圧倒的である。(東京外語大教授・国際関係論、在パリ)

と実を見極めていないことにある。という指摘などである。
本書は現代世界に関心を持つ者
〇円、TBSアフリカ

示唆に富む史的考察

「仕事の社会学」

辻 勝次著

「仕事」が、職業としての労働」となったのは、人類史的にみれば「新しい現象である。西欧では宗教革命につぐ産業革命を経て、就業人口の多数が会社や団体に雇われて働くようになったのは二十世紀に入ってからである。わが国では明治近代化以後のことであるが、本格的な職業社会が形成されたのは戦後の高度経済成長が契機であった。

被使用者の全就業者に占める比率は昭和三十年四五・五％、同四十年五八・六％、同五十年六五・六％と増加し、この傾向に拍車をかけた。
スミスやマルクスは職業は人間を本質化するものと考え、ウェー

ているが、その細部は全体的な部分ではなく、全体の象徴であった。また彼が手がけた彩色木彫は、古代から「巨匠なるものへの讃歌のあかしとして様式化され彩色された彫刻」の系譜につながるものと指摘している。(B4判、三二七頁、四万三〇〇〇円、山陽新聞社)

写真は「鏡獅子」(同書から)

「彫」平櫛田中の世界

山陽新聞社編

「七十、八十ははなれ小鏡獅子」をはじめ、仏教彫刻術評論家の本間正義氏が作品解説と口ずさみながら、百歳を先駆けとなった初期の「活人説」前期の傑作といわれる「転生」、田中が深く傾倒した芸術は、伝統の様式に立ち帰るようになってから二年。伝統の木彫家、平櫛田中が百七歳で亡くなった。伝説の木彫に西洋彫刻のリアリズムを加え、新しい近代木彫を作り上げた業績をまとめたのがこの本だ。六代目菊五郎をモデルにした跡の写真を収め、作家・詩人のたいう。田中の作品には恐ろしいほどの感銘をうけて制作された。栗田勇氏が「平櫛田中論」、美しいまでの細部の追求がなされ



フツクエント

国際政治をリアルに叙述

「新冷戦の時代」

中嶋 嶺雄著

八〇年代はいかなる世界なのか

これは現在、国際関係に関心を抱く者にとつてとりわけ大きな問題となっている。いうまでもなく、双極から多極化へと大きく変つては議論のあるところだが、著者は時代状況をつとに「生ぬるい戦争 Cool War」と規定して、この立場から本書のタイトルの「新冷戦の時代」として、国際政治の現段階をリアルに分析し、究のすめと提言、さらに「日本

出させたし、またソ連の軍力が増大とその世界的展開に対して米中日の「同盟」が指摘されるにまで至っているからである。

著者は「本質的な冷戦構造の解体である」というか……よりグローバルな冷戦への幕明けてあつたのではなからうか」と自問し、まずはじめに戦後五十年この節目における転換の真相を掘出(づきしゅつ)して、日本に密接な関係をもつ中国をはじめ、米

本書で扱われている問題は多岐にわたるが、筆者の関心をもった論点を二、三挙げると、米、日本でも一時騒がれた対ソ政策上の「チャイナ・カード」とい

現在の状況からすればソ和の可能性をも見通しておかなければならないと指摘していること、また、米ソ両大国の錯綜は中国の虚

序章「危機の時代への視角」で、中嶋教授は一九八〇年代を一九三〇年代とともに、ちょうど半世紀の歴史的時差をもつて、現代史の大きな曲がり角に当たると指摘する。

まず本書の大筋を見る意味では、第一章「現代世界の新しい潮流」に指摘されている三点がやはり重要であろう。第一は大国間のパワー・ゲームがここ当分さらに熾(し)烈化するだろうこと、第二は南北問題がますます重要な全人類的課題になるだろうこと、そして第三は国際的な相互依存関係がいよいよ増大するだろうことである。このような前提に立つて中嶋教授は中国が東西・南北問題の接合域であると説く。

「中国自身が南北問題の対象だという見方は、中国に幻想を抱いている人びとからすれば、奇異に感ずるかもしれない。しかし今日でも十億の人口を擁し、さらに人口爆発の脅威におびえながら、

一人当たりGNPは二百数十ドルにしかないという現実には、GNP指標だけからすると世界の百三十番目以下の最貧国だということなのであって、この点については、『人民日報』自身が認めているところである。これほどの巨大な国家でありながら外貨保有高が現在わずかに十三億—十四億米ドルという事実も、ほとんど知られていない。中国は、国際政治のパワー・ゲームにおいては、まさに超大国として脚光を浴びているのであるが、豊かさの指標からすれば、いわゆる最貧諸国(LDC)の一つなのである。そして中国像のもつこの二重の振幅を

中嶋 嶺雄著

新冷戦の時代

安全保障を具体的に提言

まともに受けとめ得るか否かが正しい中国認識の前提なのだとはいえよう。

右のような中国の矛盾した現実を直視することが、第二章から第六章までの基調となっている。すなわち第二章では米中関係が、第三章では中ソ関係が、第四章では中国流の覇権解釈が、第五章ではソ連脅威論が、そして第六章では東北(満州)、新疆および朝鮮半島を中心にいわゆる地政学が、解明の対象となっている。地域研究の重要性が強調されていることも注目に値しよう。

終章「日本の選択」は国際化時代に国家目標を明白にする必要を説いた後、米、中両国が誘導している日米中三角連合の危険性を戒めつつ、「日米欧先進諸国との関係を外交戦略の基軸とし、日中関係は、そうした全体構造に対するサブ・システムとして位置づけるといふ戦略的見取図を堅持すべきだと

教えている。

さらに中嶋教授はオーストラリアとの関係が日本の「生存の戦略」としてきわめて重要であることを指摘し、「単に日豪経済関係の相互補完性のみならず、たとえば対ソ外交におけるわが国の交渉能力を補強するうえでも、いまやもっとも重要な国際関係だ」と力説する。本書の透徹した分析にも、具体的な政策提言にも、私は双手をあげて賛成だ。わが国の安全保障について真剣に考える同胞に強く推したい。(TBSブリタニカ

・一、〇〇〇円)

平和・安全保障研究所理事長

猪木 正道

『毎日新聞』 1981 年 1 月 19 日

『新冷戦の時代』

中嶋 嶺雄 著

新しい冷戦時代といわれる八〇年代の国際平和を、いかに構築するかを追及している。八〇年代は不可測の時代ともいわれるが、筆者はその特徴を①大国間のパワーゲームがさらに激烈化の南北問題が全人類の課題になる②諸国間の相互依存がより重要になるとらえ、冷静に対応するよう求めている。



本文では筆者の専門分野である中国事情、中ソ関係に詳細な分析を加え、歴史的教訓から日本の選択すべき道として、非軍事経済大国が世界平和に貢献しうることを明確にすべきだと提言している。中ソ和解の見通しをも織り込んだ幅広い日本外交の展開が必要なことは、指摘の通りであろう。

(TBSブリタニカ・一、〇

00H)

『東亞』 1981年4月号

金子堅太郎』を書く切っ掛けとなった。慶応大学から法学博士を受けたのは本著の業績に因る。(評者 岩田冷鉄)

(新友堂 五、〇〇〇円)

守屋 洋著

『中国皇帝列伝』

創業篇、守成編

本書は、一九七九年一月から八〇年十月にわたって、本誌に同名タイトルで連載したもののうち、漢の高祖から明の太祖まで群雄割拠の乱世を勝ち抜き、権力を掌中にした十人の皇帝を「創業篇」に、権力を維持し得ず崩壊の道を通った十人の皇帝を「守成篇」として、それぞれ一冊の本にまとめたものである。

単行本となった皇帝列伝を通読すると、三千年の中国歴史のなかで躍動した皇帝たちのドラマが一層眼前に生き生きと浮かびあがってくる。また、近代化を推進する現代中国のなかに依然として歴史が生きてくつきその重みが近代化を阻害しているような気がしてならない。

(太)

(PHP研究所、各九八〇円)

中嶋嶺雄著

『新冷戦の時代』

ソ連のアフガン侵攻に対し、米国はソ連への経済制裁、オリンピックボイコット宣言、新年度予算での国防費増強など強硬姿勢を打ち出し、六〇年代から七〇年代にかけての米ソの冷戦緩和の方向が、一転して八〇年代は新冷戦時代を迎えると思われる。

本書は、この新冷戦下での国際平和をどう築いていくかを追及している。筆者の専門分野の中国情勢、中ソ関係に詳しい分析を加え、日本が世界平和に貢献するため選ぶべき道は、過去の体験、教訓を生かし、非軍事経済大国であることを明らかにすべきであると、提言している。

今後の日本外交の展開には、中ソの和解をも見通した幅広いものであることが必要という指摘は、一考すべきものがある。

(太)

(TBSブリタニカ 一、〇〇〇円)

陳舜臣著

『中国の歴史—全十二巻』

本書は、全十二巻、三千五百ページにも及ぶ力作であるが、第一巻を読んでみて他の著者の作品同様、博識もさることながら、文体が平易であり且つ流麗であることが、特に固くなりがちな歴史書を読み易くしており、入門者にとって有難い。

歴史は、凡そ勝者の側から書かれるケースが多いが、記録にめぐまれない側、すなわち敗者の声を、どこかにその痕跡をもとめて掘りおこしていくという本シリーズ全体を貫く著者の史観に共鳴する人が多いのではなからうか。第一巻々神話から歴史へは、ながい間、中国のモラルの基礎となった周代の諸制度の指摘で終っている。現在第三巻まで出刊しているが、今後の健康をお祈りしたい。

(太)

(平凡社 各一、六〇〇円)